



坂口安吾「日本文化私観」論

藤原, 耕作

(Citation)

国文学研究ノート, 28:35-48

(Issue Date)

1994-03

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCD0I)

<https://doi.org/10.24546/81012298>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/81012298>



坂口安吾「日本文化私観」論

藤原耕作

版側面史の昭和十六年の項には次のような記述がある。

情報局（内閣情報局）第二課長鈴木庫三少佐は、岩波書店にたいし、安部能成著『時代と文化』を例にとりその出版傾向を罵倒した。このようにこのころの出版取締りの主導権はほとんど情報局とくに軍人に掌握される。（四月十九日）

開戦前である昭和十六年の四月の段階でこうである。昭和十七年の初頭における日本出版界の状況が類推できよう。そのような厳しい状況のなかで発表された「日本文化私観」であるが、平野謙は次のように言っている。

坂口安吾の「日本文化私観」は昭和十七年二月二十八日発行（昭和十七年三月号）の『現代文学』誌上に発表された。太平洋戦争開戦から三ヶ月弱。日本軍が一月にはマニラを、二月にはシンガポールを占領し、破竹の進撃をつづけていたころのことである。太平洋戦争の開戦は出版界にとっては冬の季節の到来でもあった。政府は言論と出版に関する統制を一層強め、国策からはずれた言論をいっさい封じ込める体制をさらにかためていったのである。ちなみに、昭和十六年の十二月十九日には言論出版集會結社等臨時取締法が公布され、翌年二月には各新聞社の自主的統制機関であった日本新聞連盟が、官製の統制機関である日本新聞會に改組され、各新聞社には検閲課がおかれている。出版界については、官製の統制機関である日本出版會がつくられるのは昭和十八年の二月であるが、厳しい状況は新聞界と大差はなかった。たとえば日本近代文学大事典の近代出

石川淳の作品で最初に衝撃をうけたのが『森鷗外』だったように、坂口安吾の作品では『日本文化私観』が最初のショックだった。強力なパンチという点では、むしろ後者の方がたちまさっていたように覚えている。こんなことを書いて

坂口さん大丈夫かなあ、という危惧の念がまず第一にきた。

(略)『日本文化私観』を発表したとき、すでに太平洋戦争は勃発していた。そのとき著者はまず敢然として「日本的なるもの」を否定しようとしたのである。(略)私が衝撃を受けたのも主としてその点にかかわる。英語の片仮名名前などはすべて全廃されようという時勢に、著者は「生活の必要」をまず第一に押したて、キモノより洋服の方が便利でいい、とためらわず断言したのである。(略)ほとんど徒手空拳のまま、当時の時世のまんなかにつくと立ちあがった著者のすがたは、たしかに感動的とよぶに値していた。(注一)

平野謙の読みは「日本文化私観」評価の一つの型を代表している。すなわち「日本文化私観」は時世に対する批判、反抗であるというのである。こういった「日本文化私観」理解はある時期まで主流であつたし、現代でもそういった時流に対する同調であるか批判であるか、といった評価軸で評価されることが少なくない。しかし、そのような観点から「日本文化私観」が捉えきれぬのだろうか。「日本文化私観」という文章は重層的で幅の広い読みを許容する。ここではいくつかのレベルからの読みを試み、検討することを通して、最終的には安吾にとつての「日本文化私観」とは何か、ということを考えてみることにする。まず最初に安吾が「日本文化私観」を書く上で明白に意識しているブルーノ・タウトの『日本文化私観』と比較してみ

ることにしよう。

二二

平野謙の文章からもわかるように、昭和十年代の日本では、国粹主義が幅をきかせ、「日本的なるもの」の見直しが、各方面から行われていた。知識人たちは西洋列強に対する劣等感を、日本の古典文化を再評価することによって、拭おうとしていたのである。そうした状況の中で、西洋人側からの日本の文化の賛美であるタウトの『日本文化私観』が日本の知識人達に歓迎されたことは想像にかたくない。昭和十一年十月十五日に発行された同書は、昭和十七年十二月三十日の段階で二十五版を発行している。序で黒田清は次のように書いている。

ブルーノ・タウト氏は幸福な人である。

それは氏が何れの国にあつても其土地の魂に触れる事が出来、又其国の文化が深く蔵して居る美をはつきり見ぬく事の出来る人だからである。

滞日数カ月にしてすでに小堀遠州を日本最大の芸術家とし、又桂離宮を「日本の最終にして最高なる建築的発光点」と言い切つたのを見ても氏が如何に鋭い直感と深い洞察力とをもつて居るかが解るであらう。

吾々は、吾々の祖先が残して行つてくれた輝やかしい文化的足跡から常に変らざる真理と美とを見出さねばならぬ

義務を感じて居る。

タウト氏は今吾々と共にさうした仕事に取りかかつて居るのである。(後略)

又、訳者である森嶋郎は「訳者の詞」で次のように述べている。

日本文化の再検討とか、日本精神の昂揚とか、様々の言葉の叫ばれてゐる今日、それ等の人々のどれだけが、本書の著者ブルーノ・タウト氏程の深い理解と愛情とを以て、日本を、日本人を、そして日本文化を眺めてゐるのであるか。(略) 此処に示されたものは徒な礼賛迎合でもなければ、ためにする所あらんとする意図の下に行はれた歪曲せる批判でもない。たゞひたむきな真摯な態度、時には辛辣にも見える、その行間に溢れた誠意と愛情とは、深く読む者の心を打つものがある。私は此の書が、特に現代の日本の文化人にとつて、頂門の一針、否、それ以上の役割を勤むるものであると信ずる。

当時の日本の文化人達のタウトの『日本文化私観』の受け取り方や、状況を、これらの文章から感じとることができるだろう。坂口安吾はそうした状況に対してほとんど全否定に近い反論を提出した訳で、「坂口さん大丈夫かなあ」という平野謙の感想も理解しやすい。しかし、それを一歩進めて、笠井潔氏の

ように「桂離宮や『方丈記』を標的にした安吾の日本文化批判の背後には、当然のことながら、日本の戦争思想に対する批判が埋めこまれていた」(注二)というように読むのはどうだろうか。タウトの『日本文化私観』の批判は、同時に日本の戦争思想に対する批判になるのだろうか。

まず、タウトの『日本文化私観』は、日本の文化人達に「日本文化の再検討」であるとか「日本精神の昂揚」であるとかいったお題目を唱えさせるのには好材料となりうるが、戦争思想としては決して有力なものではない、ということを描きつけておかななくてはならない。例えばタウトは次のように言う。

一方は文化と芸術と教養のあるところ、他方はスポーツと行軍と訓練のあるところ――今日、青年の世界はかく分割されてゐるのであつて、その何れを探るか、彼等の自らの撰択に俟つ他はないのである。――床の間か、然らずんばその裏側かである。日本がこの青年達と共に、自分自身をも破壊するであらうと云ふことは、日本の運命として、避くべからざるもののやうに思はれる。政治的には、日本は更に上昇して行くかも知れないが、この途を進んで行けば、文化的には自己の席から退場する他はないであらう。

「文化・芸術・教養」と「スポーツ・行軍・訓練」が対比されており、勿論タウトは前者の方が大事であると云つてゐるのである。これはどういう読み方をしても有力な戦争思想にはな

りえない。つまり、タウトを批判することがそのまま戦争思想を批判することにはならない、ということが指摘できる。もともと安吾はこのあたりには触れていないからここではひとまずおく。安吾の直接の反論から考えてみよう。

まず、「日本文化私観」第一節の最後で安吾は「タウトは日本を発見しなければならなかったが、我々は日本を発見するまでもなく、現に日本人なのだ」として次のように言う。

彼等（欧米人―引用者注）が我々を憐れみ笑う立場と、我々が生活しつづける立場には、根柢的に相違がある。我々の生活が正当な要求にもとづく限りは、彼等の憫笑が甚だ浅薄でしかないのである。彎曲した短い足にズボンをはいてチヨコチヨコ歩くのが滑稽だから笑うというのは無理がないが、我々がそういう所にこだわりを持たず、もう少し高い所に目的を置いていたとしたら、笑う方が必ずしも利巧な筈はないではないか。

ここでの安吾の批判はタウトに対する批判としてはどうも見当違いな部分がある。タウトが日本を発見しなければならぬのに対して、我々が現に日本人であるというのはわかるが、「我々の生活が正当な要求にもとづく限りは、彼等の憫笑は甚だ浅薄でしかない」という批判はどうだろう。タウトの記述には浅薄な欧化思想やアメリカニズムを批判している部分はあるが、ここで安吾があげている「彎曲した短い足にズボンをはい

てチヨコチヨコ歩くのが滑稽だ」というような記述に対応するような部分は見出せない。また安吾は必要なもの、実質のあるものが美しいというが、実用的であるということを重ねるという意味ではタウトは彼と大して変わらない場所にいる。例えばタウトは日本の学校教育を批判して次のように言う。

最も顕著な印象は、学校が彼等を実際に即するやうに仕向けることが全然出来ないと云ふことである。学校は種々なことを、恐らくは多すぎる程種々なことを教へてくれる。それでゐる良質の生産に必要なものは少しも教へないし、実際のな仕事の過程をさへ教へない。

また、タウトが建築としての赤坂離宮を批判する場合の論拠は次の通りである。

現代の建築家が最初に熟慮しなければならぬことはまづ以て風土である。当時仏蘭西風のロココ様式で建てられた東京の赤坂離宮には爾來御滞留のことのなかつたことは周知の事実である。厚い壁のために湿気が籠り、欧風の窓を備へた設計法は、日本に於ては絶対に必要な通風を妨げてゐるのである。だが此の種の建築物は欧羅巴では頗る好都合であつたため、数世紀に涉つて住居として利用されてゐたのである。現代建築家の或る人々は、勿論同じ点ではないが、併し全然同じ意味で、これと同様な欠点を犯してゐる。

タウトの場合、安吾のように実用こそがすべてだ、とは言っていないが、実用性が必要条件であるとは考えているようである。タウトは決して実用を軽んじてはいない。つまり安吾とタウトは根本的に対立しているわけではない。ではなぜ安吾はかくまで激しくタウトを批判するのか。ここで考えられるのはやはりタウトを批判することを通して直接批判することが危険なものを批判しようとしている、というレベルでの読みである。

三

安吾の批判しているものはおそらくタウトの日本文化論自体ではなく、そういったものに過敏に反応し同調している日本の文化人たちである。タウトはまだしも実質、実用というものを見失ってはいない。しかし同時代に流行していた日本文化の再検討の動きには実質的なものはまずなかったといえる。それらは基本的には西洋に対する劣等感の裏返しのようなものに過ぎなかった。たとえば笠井潔氏は次のように言う。

安吾による日本文化批判は、モダニスト時代であろうと戦中期の翼賛詩人時代であろうと高村（光太郎）に共通している種類の、劣弱感を補填するために賞揚される「日本文化」の批判にほかならないのである。（注三）

日本文化の伝統、歴史の重み、ということがジャーナリズムで繰り返し喧伝された。又昭和十五年には「ただ単に皇国史観を拠り所とした歴史記念行事としてのみのオマツリだったわけではなく、当時のありとあらゆる文化財を総動員することで演出された、翌年の太平洋戦争へ向けての『国民精神総動員』の最終的な点検と総仕上げの祭典」（山中恒）である（紀元二千六百年祭）が開催された。そういう時代に坂口安吾は常に「日本文化の貧困」という言葉を繰り返している。それは実質の伴わない「日本文化」の賞揚に対する批判であることは言うまでもない。「日本文化私観」と同時期に書かれた「外来語是非」（注四）では次のように述べている。

先日ある新聞にラジオだのアナウンサーだのという外来語を使用するのは怪しからんと論じている人があった。皇軍破竹の進撃に付随して、このような景氣の良い議論が方々を賑わし始めているけれども、尤もらしく見えて、実際は危険な行き過ぎである。

皇軍の偉大な戦果に比べれば、まだ我々の文化は話にならぬほど貧困である。（中略）各国には各々の国語とその尊厳とがあつて、互に之を尊重しあわねばならぬものでこんなところに国辱を感じること自体が、国辱的な文化の貧困を意味している

まさしく正論だろう。安吾の批判のポイントはこういったあ

まりに行き過ぎた国粹主義、「世界に冠たる」ものとされた日本文化を相対化することにある。また戦時体制の文学ということが言われるなかで、彼は何度も「時局的な小説などは決して書く氣持がな」ということを繰り返す。例えば次のように書く。

戦時体制の文学と云う人もあるが、人各説あり、僕の考えは又違って、僕自身だけの考えで云えば、僕は戦時体制の文学というものを考えられぬ。(注五)

このあたりの自分の姿勢を決して崩そうとしない安吾の態度は、同時代にどうもだらしないう文学者が多かったことから考えるとやはり立派だといえる。しかしだからこそ彼の文学が立派だったということにはならないだろう。文学の評価というものはもう少し別な所にあるはずだ。しかしその問題はここではしばらくおく。

こういった安吾の日本文化批判を戦争に対する抵抗であるとする論が根強くあることは先に指摘した通りである。笠井潔氏の論を引く。

「日本文化私観」では、「真珠」で暗示された戦争イデオロギー批判が、あらためて日本文化批判として展開されている。

特攻戦術をもてはやす日本の戦争思想の背後には、日本

浪漫派の「やまところ」や、京都学派の無の哲学や、「四季」派の戦争詩に体现されるところの通俗的な日本文化主義がある。(中略)

安吾が標的に選んだ、桂離宮の「美」を賞賛するブルマ・タウト、竜安寺の石庭に代表される日本庭園、「方丈記」、能楽の舞台、等々は、誰がどう読もうと明らかに『日本の橋』の保田與重郎、『旅愁』の横光利一、あるいは『古寺巡礼』の和辻哲郎の、ようするに感傷的な学徒兵が愛読していたような当時流行の日本文化論のアレゴリーである。(注六)

笠井氏は安吾の「日本文化私観」は「ブルマ・タウトと日本浪漫派を串刺しに批判できる論理を展開しえた」として評価する。その評価自体はうなずけるのだが、氏が「戦争イデオロギー批判」であると言うとき、どうも違和感を感じる。戦時期、日本浪漫派的な言説が日本文化論を高揚させたのは事実だろうが、そういった風潮を批判した「日本文化私観」は「戦争イデオロギー」を批判しているのか。この場合「戦争イデオロギー」の内実が大事だが、それが笠井氏のように日本浪漫派に代表されるような「日本文化主義」であるとしたなら、それには「戦争イデオロギー」としての実質は大してない、と言わざるをえず、それを批判した安吾の「戦争イデオロギー批判」には大した意味はないと言わざるをえない。どうもそうではないのではないか、というのが私の意見である。安吾の論理がタウト

と同時に保田與重郎に代表される日本浪漫派的なものを批判するものであることは確かにその通りだと思うが、それは「戦争イデオロギー」の批判ではなかった。読みようによれば安吾の「日本文化私観」の方が余程強力な「戦争イデオロギー」になると思われる。そのことに關しては磯田光一に次のような指摘がある。

しかし、良く考えてみると、京都の寺をぶっこわして鉄橋をつくるというのは「大東亜戦争」の論理なんだ。極端に言えば「日本文化私観」は「大東亜戦争」肯定論としても読めるんです。そこをいままでだれも言っていない。あの戦争はただファナチックじゃなくて、堂堂たる近代的戦争です。（中略）

『日本文化私観』があの時点で発表できたのは、家庭の中にある金属を供出して鉄砲をつくるという論理と、京都の寺がぶっこわれてもかまわないという論理が、まさに同じものだったからです。具体的にいうと、あのエッセイの翌々月、五月九日に「金属回収令」が出て寺の鐘が強制的に奪われているんです。あれを一方的に反戦と見た安吾観のほうがおかしいと思う。（注七）

磯田光一は別なところで「非常に屈折した現実肯定」という言い方をしているが、安吾は確かに戦争という現実を非常に屈折した形であるにせよ肯定していたと思われる。人間に關する

全てを肯定する、というのは安吾の繰り返すファルスの精神である。

ファルスとは、人間の全てを、全的に、一つ残さず肯定しようとするものである。凡そ人間の現実に關する限りは、空想であれ、夢であれ、死であれ、怒りであれ、矛盾であれ、トンチンカンであれ、ムニャムニャであれ、何から何まで肯定しようとするものである。（注八）

そういった立場から安吾は戦争という現実を肯定しようとしていただろうと思われる。

安吾の立場は浅薄な「日本文化論」を批判するものではあっても「反戦」に通じるものではない、というのは「青春論」（注九）の三の宮本武蔵を読むともっと分かりやすい。安吾の提示する武蔵は、「溺れる時にも藁をつかんで生きようとする、トコトンまで足場足場にあるものを手当り次第利用して最後の活へこぎつけようとする」、そういう武蔵像である。そういった武蔵像を提示した後安吾は次のようににつづける。

之が本当の剣術だと僕は思う。なぜなら、負ければ自分が死ぬからだ。どうしても勝たねばならぬ。妥協の余地がないのである。こういう最後の場では、勝って生きる者に全部のものがあり、正義も自ら勝った方にあるのだから。是非が非でも勝つことだ。我々の現下の戦争も亦然り。どうし

ても勝たねばならぬ。(注十)

「我々現下の戦争も亦然り。どうしても勝たねばならぬ」というのは時流に対する挨拶などというものではないのではない。それは実証しようがないのでとりあえずおくが、こういった安吾の考えというのは、読みようによれば充分に戦争の肯定ということにつながろう。また、よく引かれる文章であるが、「伝統の無産者」(注十一)では次のように言っている。

ヨーロッパに比べれば我々の文化の伝統はかなり劣っている。源氏物語もある、法隆寺もある、世阿弥もいた、と言ってみても、国全体の文化は決して高くはなかった。

然し、現今の如く知識の方法が確立して、能力次第で文化の摂取が無限に可能な時になると、伝統などというものは意味をなさぬ。我々は東京が廃墟と化してもより立派な帝都を作るに事欠かないし、法隆寺の瓦を大砲に代えることに取えて多くは悲しまぬ。伝統の遺産を持たない代わりに、伝統を生むべき者が我等自身だからである。

「日本文化私観」の思想が「法隆寺の瓦を大砲に代えることに取えて多くは悲しまぬ」という大戦下の「金属供出」的な論理に直結していることが理解できるだろう。また、「鉄砲」(注十二)の中では「日本最初の近代戦術」を編み出した信長の精神を称揚し、「形骸のみあつて実質な」き徳川氏を批判した後、

次のように結ぶ。

今我々に必要なのは信長の精神である。飛行機をつくれ。そのみが勝つ道だ。

少なくとも「戦争イデオロギー」としてはこういった安吾の思想の方が「実質」のあるものだったといえる。

ところで、このあたりで一度立ち止まって考えてみなければいけないが、磯田光一が「日本文化私観」を「大東亜戦争肯定論」だと読むのと、笠井潔氏が「戦争イデオロギー」批判だと言ふのとは、明らかに矛盾しているようだが、なぜそのような読みが両立するのだろうか。これはごく大雑把に言って太平洋戦争の論理自体に二面性があったからである。まず、磯田光一が「日本文化私観」に読み込んだように太平洋戦争には近代戦としての論理がある。安吾は信長の戦術に近代精神を見、戦争に勝利するためには信長の精神こそが必要だと書いていた。そういう戦術面での近代主義が必要であることは当然である。いくら日本精神が強調されていた時代であるとはいえ、日本古来の兵器を用いていたようでは当然勝ち目はない。近代兵器が必要なのである。しかし、一方、戦争をするためには名目上のものとはいえ、一応理念が必要である。第二次世界大戦に参戦する際の日本の理念は、西洋の帝国主義的支配からの東洋の解放というものであった。勿論その内実は実にお粗末なものであったが、それはともかく、西洋に対する東洋、日本ということが

強調されていたのだから、西洋的な近代主義というものが標的になるのもある意味では当然のことである。「近代の超克」というような言葉が流行する所以である。ここに矛盾が生じる。西洋からの東洋の解放という理念を唱えながら、それを可能にするのが西洋の論理（近代戦の論理）であるという矛盾である。だからこそ「近代の超克」に代表される「日本文化主義」が「近代戦の論理」としてみればまるで意味のないものとなり、それを撃つ安吾の論理がある面で「近代戦の論理」につながるという妙なことになるのである。

しかし、私は安吾が戦争犯罪人だったと言いたいわけでは勿論ない。ジャーナリズムでファナチックな国粹主義的言説、神がかり的言説が当たり前だったこの時期、安吾の意見はあまりに正論過ぎて、一般に反響を呼ぶということではなかったようである。大河内昭爾氏は次のように言う。

戦時的思维を日常として育ち、敗戦後の百八十度転換を突然の天変地異のごとくしかうけとれなかった昭和初年生まれの私などにとっては、昭和十六年における「日本文化私観」の発想はおどろくべきことがらというよりも、まるで不思議なことではなかった。（注十三）

ウルトラ・ナショナリズムが幅をきかせる中で、「日本文化私観」は多くの人にとって「不思議なこと」ではなかったのではなかろうか。

安吾の論理は確かに「近代戦の論理」に通じる部分がある。しかしそれは「時局」を考慮した発言ではなく、あくまで彼の身についた思想であるということを強調しておきたい。戦時期の多くの「日本文化主義」者たちは戦後口を閉ざすか、論調を百八十度変えることになるのだが、安吾の場合論調が変化するということは全くない。「日本文化私観」における彼の主張は戦後における彼の思想の基調となっていくのである。

「日本文化私観」はあるレベルで読めばタウトの批判を通して浅薄な「日本文化主義」を、磯田光一の言葉を借りれば「文化右翼」を批判しているようにも読める。しかし、それはおそらく「反戦」を意図していたものであるとは言えないし、それ自体が「戦争イデオロギー」になるものである、という読み方も実り多いものとはいえない。というのも、そういう線で読んでいく限り安吾の論理というのは「近代の超克」に対しての素朴な近代主義を遠く出るものではないように考えられるからだ。「伝統の美だの日本本来の姿などというものよりも、より便利な生活が必要」であり、京都の寺や奈良の仏像が全滅しても困らないが、電車が動かなくては困る」というのは、ほとんどそのまま明治以来の日本の文明開化の論理なのである。つまり、「日本文化私観」を「文化右翼」批判として読めば、安吾評価は素朴な近代主義者というようになところに落ちつきかねない危険性がある。そして実際に「日本文化私観」で安吾は部分的にそういった素朴な近代主義者の相貌をみせている。木橋が鉄橋に変わり、故郷の古い姿が破壊され欧米風の建物が出現するこ

とに喜びを感じる、「生活の必要」がすべてで、法隆寺を取り壊して停車場をつくるのも必要ならばよい、などという人口に膾炙しやすい部分がそうだ。このあたりの論理は明治初期の欧化思想、文明開化の論理とそう遠いものではなく、それ自体として高い評価に値するものではない。ただ、時代の主流が「近代の超克」の方に向かっていたから新鮮に映るだけなのである。

しかし、安吾が単なる近代主義者、社会改良家として「日本文化私観」の中に立ち現れているのか、という点決してそういうわけではない。第三節の「家に就て」の最後で安吾は「自由を我等に」という映画を例に出して、そこでの自由というものの認識が、毎日飲んで遊んで暮らしていられたら自由で楽しい、という程度だということに触れて、次のように書いている。

社会改良家などと言われる人の自由に対する認識が、やっぱり之と五十歩百歩の思いつきに過ぎないことを考えると、文学への信用を深くせずにはいられない。僕は文学万能だ。なぜなら、文学というものは、叱る母がなく、怒る女房がいなくとも、帰ってくると叱られる。そういう所から出発しているからである。だから、文学を信用することが出来なくなったら、人間を信用することが出来ないという考えでもある。

このあたりでの安吾の言説は素朴な社会改良家、近代主義者

のものではなく、はっきりと「文学者」のものになっている。安吾は第一節の終わりで「僕自身の『日本文化私観』を語って見ようと思う」と言っているが、これは彼自身の「日本文化私観」を語ったものであると同時に、彼自身の「文学」観を語ったものでもある。それともかなり個人的な彼自身の「文学」に対する決意を述べているところはこの文章の真骨頂があるのではないだろうか。そういうレベルからもう一度「日本文化私観」を読み返してみよう。

四

第四節「美に就て」は三年前の取手在住時代の回想から始まる。後で触れるが、この時代は安吾にとって文学上の試行錯誤時代であった。このときに安吾の心を惹いたのが小菅刑務所なのである。その大建築物には「一カ所の美的装飾というものもない」のだが、安吾はどこかしら「その美しさ」に心を惹かれるように思う。「懐かしい」感じがした、という。これに似た体験として書かれるのが十数年以前の学生時代の頃で、聖路加病院の近くのドライアイス工場に関する回想である。この工場も奇妙に安吾の心を惹く。「一切の美的考慮というものがなく、ただ必要に応じた設備だけで一つの建築が成立って」いて、「魁偉であり、異観」なのだが、安吾には「頭抜けて美しい」ことが分かるのだ。安吾はこの工場に「郷愁につづいて行く大らかな美しさ」を感じたという。この二つの建築物に共通する

のは彼の「郷愁をゆりうごかす逞しい美観」があるということである。ここで安吾がそれらに対立する美として提示するのは法隆寺や平等院の美しさである。法隆寺や平等院の美は「古代とか歴史というものを念頭に入れ、一応、何か納得しなければならぬような美しさ」なのであるが、小菅刑務所やドライアイス工場の美は、彼の心に直接突き当たり、はらわたに食い込んでくるもので、彼の心をすぐに郷愁へ導いていく力を持っていた。更にそれらに共通する美を持つものとして、ある春先にとある港町で見かけた駆逐艦があげられる。その美しさも彼の魂をゆりうごかした。この三つのものを統合して、安吾は一体それらの何が彼にとって美しいのか、を考える。それは「美しくするために加工した美しさが、一切ない」ということで、「必要なもののみが、必要な場所に置かれている」ということである。ここで書かれる言葉が「すべては、ただ、必要ということだ」なのである。

そして、ここで最も注目しなければならないのは、これらの美というものがそのまま「僕の仕事である文学」に結びつけられていると言うことである。

僕の仕事である文学が、全く、それと同じことだ。美しくみせるための一行があってもならぬ。美は、特に美を意識して成された所からは生れてこない。どうしても書かねばならぬこと、書く必要のあること、ただ、そのやむべからざる必要にのみ応じて、書きつくされなければならぬ。

ただ「必要」であり、一も二も百も、終始一貫ただ「必要」のみ。そうして、この「やむべからざる実質」がもとめた所の独自の形態が、美を生むのだ。実質からの要求を外れ、美的とか詩的という立場に立って一本の柱を立てても、それは、もう、たわいもない細工物になってしまふ。これが、散文の精神であり、小説の真骨頂である。そうして、同時に、あらゆる芸術の大道なのだ。

問題は、汝の書くこうとしたことが、真に必要なことであるか、ということだ。汝の生命と引換えにしても、それを表現せずにはやみがたいところの汝自らの宝石であるか、どうか、ということだ。そうして、それが、その要求に応じて、汝の独自の手により、不要なるものを取去り、真に適切に表現されているかどうか、ということだ。

「日本文化私観」の中でおそらく一番重点を置いて読まなければならないのはここである。一見近代主義的、機能主義的な彼の言説の底には、彼自身の「文学」に対する認識、「文学」に対する決意が流れているのである。そしてここで語られているのはあくまで安吾自身にとっての「文学」であり、「必要」という言葉は安吾自身にとって必要かどうか、ということが大事件なのだ。安吾があくまで彼自身の「直接心に突当り、はらわたに食込んでくるもの」について語っているからこそ、私達にも通じてくる部分があるのである。それは「近代の超克」全盛時代に近代主義を対置させてみせたから新鮮だ、というのとは

全く別の問題である。時代背景が変われば、評価もどうとでもなるようなことを、安吾は言っているのではない。

安吾が小菅刑務所やドライアイス工場を美しいと言うときに、懐かしさや郷愁というものを感じているのは見逃せない。当然のことだが、小菅刑務所やドライアイス工場を見る人がすべて懐かしさや郷愁を感じるわけではない。安吾は第一節の終わりで「僕自身の『日本文化私観』を語ってみようと思う」と書いていたが、彼はあくまで個人的な感慨を述べているのだ。柄谷行人氏は「日本文化私観」はきわめて「私的」なエッセイである、とした（注十四）。安吾が立っているのがあくまで個人的な感慨である、という点において私も同じように感じる。しかし、安吾が、自分の書こうとしたことが自らの生命と引換えにしてもそれを表現せずにはいられない自らの宝石であるがどうかをつきつめ、その要求に応じて不要なるものを取去り、真に適切に表現されることが「散文の精神」であると考え、「僕自身の仕事である文学」だと認識し、「日本文化私観」を書いている点で、彼自身の個人的な感慨は普遍へと昇華されている。「日本文化私観」で安吾は彼自身の「文学」に対する決意を表明しているのである。

「日本文化私観」は後に『墮落論』（注十五）に収録されるが、その後記で安吾は次のように書いている。

第一部は私がいれば思想の星雲状態から現在に至る生き方を思想的に定着させた作品、私はいわば「日本文化私観」

によって私の生き方を確立したのであったが、それが発展して青春論となり、これが第二部、戦後の墮落論その他へ発展したものであった。

「思想の星雲状態から現在に至る生き方を思想的に定着させた作品」が「日本文化私観」だというのが安吾の認識なのだ。

また、「日本文化私観」の中に挿入されているいくつかの回想が、それを裏付ける。第二節の「俗悪に就て」の冒頭で、昭和十二年に京都に滞在していたことが書かれている。そこに出てくる「書きかけの長編小説」というのは、昭和十三年七月に出版された『吹雪物語』（注十六）のことである。『吹雪物語』は昭和二十二年に再版されるが、その時の序に安吾は次のように書いている。

この本を出版後の東京に於ける一ヶ年の荒れ果てた生活、次に利根川ベリの取手という町の一ヶ年の流浪生活、それから更に一ヶ年、小田原に於ける流浪、私の魂が流浪し、さまよい、淪落の底にまみれて、ともかく私が多少とも新らたな発足を新らたな視界を自覚し、表現し得たのは、三年の後のことであつたのだ。

もう一つ、四の冒頭に取手在住時の回想が書かれているが、同時期のことを回想した「居酒屋の聖人」（注十七）には次のような記述がみられる。

僕が取手にいた時は全く自信を失って、毎日焦りぬいていながら一字も書くことが出来ないとする時でもあった。毎日、ねていた。夕方になると、もつくり起きて、トンパチ屋へ行く。

小菅刑務所に郷愁を感じ、その美にうたれたのはちょうどその時期のこととして語られているわけである。

これらのことを総合して考えてみる。『吹雪物語』執筆以来、安吾は文学創作という面で自信喪失していた。おそらく何のために書くのか、という問がその流浪と淪落の生活の中で彼の頭にあったことは疑いない。その間に対する答が「日本文化私観」の「ただ『必要』であり、一も二も百も、終始一貫ただ『必要』のみ」ということなのだ。これは勿論先程から述べているように素朴な近代主義や機能主義とははっきりと一線を画するものである。これからの安吾文学の原点を示している「文学」に対する認識なのだ。安吾が「僕は文学万能だ」といい、「文学への信用を深くせずにはいられない」といつていたのを、軽く聞き流してはいけない。安吾は文学者としての決意を述べているのである。「文学」を信じる、ということとは近代主義や機能主義によって得られる結論ではない。一つの立場の選択である。「日本文化私観」においての安吾は自らの揺るぎない立場をしつかりと獲得しているのである。だからこそ彼の言説には説得力がある。あくまで個人的な感慨に立脚しながらも説得力を持つ

ているのである。それは彼の書くこうとしたことが彼にとって「真に必要なこと」であったからであり、自らの命と引換えにしても、それを表現せずにはやみがたいところの「自らの宝石」であったからである。「日本文化私観」が安吾の言う意味での「美」を放つ所以である。

注

※ 坂口安吾作品の引用は基本的に筑摩書房文庫版全集に拠った。

一 「作品解説」、講談社日本現代文学全集 90（昭和四十二年一月十九日発行）

二 「第四の選択」「真珠」と『日本文化私観』、「現代思想」平成二年八月

三 注二参照

四 昭和十七年四月十二日発行『都新聞』

五 「巻頭随筆」「現代文学」昭和十八年七月

六 注二参照

七 対談「坂口安吾の精神」秋山駿・磯田光一『ユリイカ』

昭和五十年十二月

八 「F A R C E に就て」『青い馬』昭和七年三月三日発行

九 昭和十七年十一月、十二月『文学界』

十 「我々の現下の戦争も亦然り」の部分は戦後『墮落論』（昭和二十二年六月二十日発行、銀座出版社）収録の際に

削除されている。

十一 昭和十八年五月一日発行『知性』「辻小説」欄

十二 昭和十九年二月一日発行『文芸』

十三 「日本文化私観」『解釈と鑑賞』昭和四十八年七月

十四 「『日本文化私観』について」『文芸読本 坂口安吾』

昭和五十三年六月、河出書房新社。

十五 注十参照

十六 昭和十三年七月二十日発行、竹村書房。昭和二十二年七

月五日発行、新体社。

十七 昭和十七年九月一日発行『日本学芸新聞』

(ふじわら こうさく／本学大学院博士課程)